

(参考資料)

三番瀬・猫実川河口域見学会 (6 / 5) 資料

三番瀬・猫実川河口域の見学会

三番瀬の真ん中を市川航路が北西の風道のように抜けています。市川航路の西方、浦安入船護岸との中間の海を漁船が通る人工の“みお”が折れ曲がった釘のように、日の出護岸の先端に向けて延びています。その先は浦安沖の巨大な浚渫くぼ地に落ち込みます。見学予定の猫実川河口域はその深い人工みおと、浦安護岸に囲まれた三角形の浅海域です。この静穏な汽水性の海域は、県の自然環境調査によれば、「生物の多様性から重要な底泥質干潟・浅海域」であると評価されています。今日は、AP-18cm (千葉灯標11:53) の大潮で、そこに広大な干出域 (約22ha) が現れ、カキ礁はじめ様々な生物相が観察できます。

案内役の市民調査の会や、「一人でも多く海を見て欲しい」と船を出してくださった澤田さんからも興味深いお話が聞けると思います。

日時：6月5日 (木) 10時30分 (時間厳守) ~ 12時30分

場所：市川市行徳漁協・組合事務所前 (塩浜1丁目護岸東端行き止まり)

参加費：1000円、保険料、資料代等

観察：挨拶、事務連絡、胴長靴などの装着、市川漁港から乗船、塩浜護岸沿い水路を西端まで走り下船。約1時間をかけて干出域を西方のカキ礁方向に向かって歩きながら、水・泥質、形状や、干潟の生き物 (アナジャコなどの生息穴、稚魚、かになどの生物、海藻) などの観察をします。(当日、カキ礁付近で市民調査のスタッフにより酸化還元電位の測定が行われる予定です。)

案内役：澤田 (行徳漁協)、市民調査、伊藤、竹川、牛野、山下東子 (明海大)

三番瀬再生会議関係委員：岡安 (海岸工学東京海洋大)、蓮尾純子 (行徳野鳥観察舎)、同観察舎より1名、小倉久子 (県環境研究センター)、市原 (県三番瀬再生推進室) マスコミ：袴田 (毎日新聞船橋支局)

帰船・解散：12時に警笛合図で船に向け集合・乗船。上陸解散。

持ち物、服装：あれば胴長靴、飲料水、帽子、タオル、あれば双眼鏡、カメラなど、
(見学中は昼食の予定はありません。)

当日の問い合わせ先：(080-5010-6922 竹川)

* 気象悪く中止の場合は朝の8時に決定します。

* 徒歩、場所不案内の方は京葉線市川塩浜駅10時に車 (竹川) でお迎えに出ています。

実施責任者：澤田洋一、竹川未喜男

以上

”三番瀬のカキ礁 “国際シンポでも評価！

普通の干潟と異なる生物相の存在

「カキ礁が失われるとその重要な生態系の恩恵も失われるとの認識が広まってきました。カキ礁は無脊椎底生生物の重要な生息地であり、魚類に対しては捕食者からの避難場所と餌場を提供しています。さらに、カキは水中の植物プランクトンと海底の食物網をつなぐ重要な役割を果たしています。また、いくつかの河口域ではカキが窒素循環の重要な一部を担っていることも分かっています。現在、カキ礁復元の努力が払われていますが、単に漁業の回復だけでなく、失われた生態系の恩恵を取り戻すことに主眼が置かれています」。この春開催された日米カキ礁シンポジウムでアメリカ「チェサピーク湾でカキ礁復元と漁業」について発表されたルーケンバーグ教授のお話です。

猫実川河口域に広がるカキ礁の生態系はどうなっているのだろう。この国際シンポジウムの実行委員長をされた高島麗さんが2004年に調査された報告書で確かめてみました。

この調査の動機について高島さんは「2002年から始められた市民調査の回数を重ねる毎に、猫実川河口域には、一般的な干潟とは異なる生物相が存在することが明らかになり、その多くが市川塩浜護岸より沖合500メートルほどの海域に広がるマガキの群集（カキ礁）の周辺に出現するから」と述べられています。調査は6月から9月の大潮の時に、カキ礁の内部と周辺の生物について目視と、採取により確認した生物種を記録し、種の同定の困難なものは専門家の意見を聞くなどして精力的に調べあげたものです。生物の出現場所とカキ礁との位置関係、生息状況についても、カキ表面に付着か、カキの隙間か、カキ礁内のタイドプールの中か、干潟表面かなどが観察されています。同時に生息度についても「非常に多い」から「見られるが、少ない」までの7段階の判定まで付されています。

記録された生物は海綿から二枚貝、魚類、海藻から鳥類まで、合計111種にも上っています。その中の約半分、55種がカキ礁の内部だけで確認され、残りの56種がカキ礁の周辺となっています。さらに生息度の高い4の「しばしば見られる」から、7の「非常に多い」までを見ますと、カキ礁の周辺の生物33種に比しカキ礁内部には47種もいます。スジエビモドキ、ヨコエビ、ケフサイソガニ、タイワンガザミ、

イシガニなどの節足動物やアカニシやイボニシの卵、マハゼや、ボラやアナゴの稚魚、そしてこれを餌とするカワウ、コサギ、ウミネコ、イソシギなども来ています。タマキビやアラムシロガイも非常に多い種目です。そうした生物の中に再重要保護生物のAランク、アリアケモドキや、ウネナシトマヤガイも含まれています。まさにカキ礁生態系といえる状況です。カキ礁周辺の生物にも注目すべきです。生息度4以上の生物33種については、カキ礁内のように高密度ではありませんが、重要保護生物Bのサビシラトリ、要保護生物Cのオキシジミ、一般保護生物Dランクのマメコブシガニや、ヤマトオサガニ、エドガワミズゴマツボ、などの希少種も記録されています。またアミ、ゴカイ類、フジツボ類、アナジャコ、ニホンスナモグリ、シマハマツボ、チロリ、トサカギンボやヒラメの稚魚、シオフキ、それにコアジサシも来ます。カキ礁の周辺にはまた泥干潟の上に構築されたカキ礁は岩礁性の生き物にも棲家を与えています。まさに泥質干潟とその上に構築されたカキ礁が普通に見られない貴重な生物相をつくり出しているのです。高島さんは、稚魚などの魚類やカキ礁の中の甲殻類などを調査すれば、さらに多くの生き物が出現するだろうと予想されています。

カキ礁は海の環境が悪化している証拠である、ここに昔からカキ礁などはなかった、とか、カキ礁は他の生物を駆逐してしまうという主張もあります。「バーチャルはいけない。現場に出て自分の目で見、手で触れ、においを嗅ぎ、深く考える。人類の遺伝子を最大限活用し、真理の道を探る。偽者に惑わされるな。本物を見抜き大切にしよう。」“森林の官脇 昭氏”の言葉は含蓄に富んでいます。

「東京に匹敵するようなニューヨーク、そうした近郊の海は非常に汚染が進んでいます。ですから東京湾という所でこんなにカキが自生しているというのは非常に信じられないような状況です。」「私たちと違って皆さんはカキ礁の研究をするために膨大なお金や時間や労力を使ってカキ礁を復元することに費やさないでいられるから幸せです。」カキ礁シンポジウムで聞いた印象的なアメリカのカキ礁研究者の感想でした。